九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

最近に於けるフランス中世経済史の研究動向

宮本，又次

https://doi.org/10.15017/4362422

出版情報：經濟學研究. 21 (4), pp.33-66, 1956-03-20. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

最近に於けるフランス中世経済史の研究動向

宮本又次

一

最近に於けるフランス社会経済史学の研究は寧ろ近世・近代史に重点があるといつてよいであろう。近世史に関する多彩なる研究成果にはまことに刮目すべきものがある。しかしながら中世史に関する研究も決してないがしろにされているわけではない。従来の克明なる成果をふまえて、その伝統の上に新見解として見るべきものが少くないのである。ここでは中世経済史の研究の動向を最近の十カ年間位を限つて窺つて見たい。中世という時代は、しかしながらどこをいうのであろうか。時代区分の問題は常に困難であり、いまもなお歴史家を悩ましつづけている最大の課題であるといつてよかろう。どこに中世の範囲と限界をもつてくるかということは最も歴史家の関心を惹いていることがらだといえよう。古代の断落と中世への接合をどこにもつていくかということはつとにピレンヌが「マホメットとシャルマーニュ」(Mahomet et Charlemagne,1937) に於て考慮せる所であるが、以来いくたの歴史家がこの焦点をめぐつて論議を重ねているので

ある。かつてピレンヌは中世の発端をアラビヤ人の侵入に結びつけて説いていたが、今日の学界人は必らずしもこれを肯べなつているわけではない。あるものはコンスタンチン大帝の時代少くとも四世紀にそれを求めている。そしてここに新しい歴史の時代を劃そうとしている。またあるものは伝来的の考え方、即ち五世紀に中世のデビューを考えるもので、矢張ゲルマンの侵入に重点を置いている如くである。この問題の興味はいまもつきないであろう。しかし今日の歴史家はこの点にもはや一時程の関心を示していないのではないであろうか。かつて一九二五―一九四〇年の歴史学界においてこの点が論議され、華かな脚光をあびた様なことは今日ではもう過去のことになつている。中世の末期についてはどうか。封建制より資本制への移行は矢張論議の岐れる所であろう。これは資本主義を如何に定義し、封建制度をいかに理解するかによつて説がわかれているといわねばなるまい。しかし一般には一三〇〇年頃に境界をおくことに一致している様だ。しかし一四―一五世紀、中世の後期をいかにとりあつかうかということは問題でもあるし、この時期はもつとも面白いのである。

フランスの大学に於ける中世経済史・社会史への講義や研究は依然として盛んである。

いずれの大学に於てもこの問題は専門家の心を惹いている所である。しかし、社会経済史家の共通の興味は矢張資本主義の成立にあり、近代史にあるのではないか。パリ大学に於てもラブルース Labrousse を初めビラール Vilar・ムーブレ Meuvret・ゴンベール Gonbert・モラゼ Morazé・ロームLhomme・フェーブル Lucien Febvre・ルーイォー Leuillot の俊秀はいづれも近世又は近代経済史の専門家であるといつてよい。中世期への攻究は社会経済史の場合以前に

くらべて弱まつているといつてよいであろうか。いまパリ大学に於て中世史の経済的社会的考究がいかになされているかを概観的に見て行こう。いま本年度に於ける講義題目から窺つて見よう（一九五五―一九五六）

まず大学部であるが、ホーチェ教授（Professeur Fautier）が中世史の研究をなしている。九八七年から一四九八年にいたる公的の制度を取扱つているが、これは寧ろ一般史・政治史的なものと考えられる。エドモンド・ペラン（Perrin, Ch-Edmond）は中世史の題目の下に中世ドイツの封建制を取扱つている。（例えば Perrin, Ch.-Ed; La société rurale allemande, d'après un oeuvrage récent, Revue historique du droit français et étranger, 1945 の論文がある。）フェロア（Edouard Ferroy）は封建制（La féodalité）に関する講莚をはり、ルノアール（Renouard）は中世経済史の講義題目をもつて、一般的に中世経済史を取扱うと共に、イベリヤ半島に於ける十四・十五世紀の経済生活について論じている。法学部に於てはロームをはじめブェスニイエ Besniier, モーニェ Monier, ヴィリエ Villiers 等が制度史と社会事実、経済的事実の歴史の講義をしている。しかしこれは矢張近代史である。次にエコール・プラチーク・デ・オート・エチード（Ecole pratique des Hautes Etudes）に於てはどうか。社会経済史は二つの部門にて行われている如くである。即ち第四分科の歴史科学と哲学との分科（Section des sciences historiques et philologiques）であり、他は第六分科の社会経済科学分科（Section de science économique et sociale）である。そもそもエコール・ド・オート・エチードというのは一八六八年にビクトール・デュリー（Victor Duruy）によつてもうけられたもので、理論的教授の側にあつて、それを強化し拡充せんとの目的をもち、実習・演習に重きをおくもので、六分科に分れている。数学・

物理化学・自然科学・歴史と哲学・宗教学・経済学と社会学の六である。第四分科に於てはモウゼとラブルースの二氏が経済史を講義しているが、中世については別にコルナエール（Emile Coronaert）の講筵を注目すべきである。それは十五・十六世紀についてのものであるから、中世史とはいえぬが、多少とも関連をもつであろう。ここでは有名なロベール・ブートルューシュ（Robert Boutruche）の中世史があつて、社会経済史への関心を示している。十五世紀のフランスの貴族についてのべ、又別に九世紀より十三世紀の末期に至る封建社会とその環境の制度を取扱つている。かつて日本にも来て日仏会館々長となり、「鎌倉時代」の著書もあるロングレイ（F. Joüen des Longrais）がイギリスの法制史を論ずるのみならず、一〇六六年から一四八五年に至る英仏の教会法制を教えている。法制史ではあるが、社会経済史への関係課目として重要性をもつであろう。

第六分科では中世史に関してはロンバール（M. Lombard）のものを挙げねばなるまい。七世紀乃至九世紀の征服移民に関する社会経済史的側面をあつかい、又十六世紀に於ける回教徒世界の経済を論述している。更に講師のシュワアルチュフース（Sinun Schwarzfuches）は中世に於ける猶太人社会の経済構造と経済的役割を論じている。地理的歴史の課目の中にエル（C. Heller）の古代及び中世に於ける信用の歴史的研究を見い出すであろう。法律社会学の講義課目の中にペトー（Petot）のものが興味ありげである。フランス封建制の経済的側面と荘園の財政についての講義である。

Collège de France の第二部は Sciences philosophiques et sociologiques であるが、そこで本年度は教授コルナエール（Emile Coornaert）が十七・十八世紀の商事会社や植民についてのべると共に中世末期に於けるヨーロッパの商

業一般をとりあつかつている。又第三部 Sciences historiques philologiques et archéologiques に於て Roger Dion は géographie historique de la France の題目をもつてブドウ畑の歴史やブドウ酒商業の歴史をとりあつかつている。またブルウデル F Brudel は Lucien Febvre の講座をうけついだ人であつて、本年は十六―十八世紀を取扱つている。他の大学例えばストラスブール、トウルーズ、モンペィエ、リエージュ・リールなどには立派な経済史の教授がいるが、中世史についての経済史的関心は近世に比べると多くは払われていないと考えてまちがいない。

二

中世経済史に関するガンのピレンヌの業績と影響ははかりしれない。ドプシュの残映も大きいが、フランス語系の学界にはやはりピレンヌのそれが圧倒的に大きいといえよう。商業史的に見て、中世の成立をどの辺に考えるべきであるかとの問題をめぐつてアンリ・ピレンヌ（Henri Pirenne）の所論についての論争がいまもなお活潑であることを注目せねばならぬ。ピレンヌの旧稿は今日では Histoire économique de l'occident médieval, Bruges, 1951 なる論文集をもつて知ることが出来る。ピレンヌを思うとすぐそれの後継者と考えてよいベルギーのガンスオーフ（Ganshof）が思い浮ばれる。フランスの経済史、社会史学会とベルギーのそれとは、矢張若干のニュアンヌと隔りはあるにしても一体として包括的に考えないとその学問的交流の緊密さからいつて妥当ではないと思う。だからここでは必要な限りベルギーのそれをも含むことを許されたい。

中世は近世が国家的国民経済的であるに反して著しくインターナショナルな点が濃厚であることを認めざるを得ない。中世をインターナショナリズム internationalism の見地から考える人の一人に上述のガンスホーフがいる。彼がその独創的な書物をこれにあてているのは注目してよかろう。(Histoire des Relations Internationales 1. Le Moyen âge, Paris, 1953) ガンスホーフはそれによって王や国の関係ではなくて、即ち単なる外交に限らず、巡礼の問題やユダヤ人や外国人の地位問題、国境の設定、外国の地に於ける商人的植民の問題などを大きく取りあげているのである。そこでは記述的説明的な歴史家の立場が組織化・綜合化の解明的立場とうまく調和しているのである。かくて中世史の古めかしいテーマが新しい衣をつけて浮び上っているといってよい。それは云わば組織化的モノグラフィー (monographie systématique) といってよいであろうか。それは言葉の本当の意味に於ける歴史的綜合 synthèse historique といえるであろう。

最近に出たケンブリッジ中世史要 (Shorter Cambridge Medieval History) は初めは Previté Orton によって、ついで Philip Grierson によって完成されたもので、その見事な出来ばえはいくら評価しても評価しすぎるということはないと思うが、なんといってもそれは要約という所に長所をもつもので、レジュメ résumé であっても本当の意味での綜合 synthèse とはいえない。長い探求の歴史と、願望とをもって育って来たフランス系史学に於ける綜合の問題はやはりこのガンスホーフの研究などが代表作なのでないであろうか。こうした意味でのモノグラフィー的な研究はフランスではドウリンゲル Dollinger、モラー Mollat、ブートルユーシュ Boutruche によってあざやかになしとげられているといってよかろう。なおこの点については例のカルメット J. Calmette の論文、封建的世界 Le monde féodal (Collec-

tion "Clio") をあげねばなるまい。これはイグネー Ch. Higounet との協力によつてなしとげられたものだ (Paris, 1951) 最近のフランス史学の傾向はもとより社会経済史学の重視にあるが、政治史も閉却されているわけではない。しかし政治史と題しても、その中で社会経済史学に多くの連関をもつているものが少くない。中世の初頭についてはラアトーシュ R. Latouche, Les grandes invasions et le crise de l' occident an Vème siècle (1946) をあげることが出来るし、シャルマーニュの時代についてはアルファン L. Halphan, Charlemagne et l'émpire carolingien, Paris, 1947 が高い価値をいまも持つていよう。前期中世 (haut-moyen âge) については J. Dhondt, Étude sur la naissance de principauté territoriales en France aux IXème et Xème siècle (Gand, 1948) がよいが、とりわけ第一級のものとしては故フェルジナン・ロートの見事な綜合である「フランスの誕生」(Ferdinand Lot, La naissance de la France (VI ème XI ème siècle, Paris, 1948) をあげるのが適当であろう。

三

近世史でもそうだが、とりわけ中世の経済史に於ては社会史とわけることが困難であるし、それは不可能に近い。本来の経済史学がめざす様な統計・図表(ダイヤグラム)・公式(フォルムユール)を用いることはいまの所まで中世史の場合は困難な状態にある。大体に於て中世史の経済史的論述はなお記述的(デスクリプティーブ)であるといわねばならぬ。

シャルル・フェルランデン (Ch. Verlinden) はその著「一般経済史序説」(Introduction à l'histoire économique

générale, 1948) の中で三つの簡単な、しかし明快なる章を中世経済史のためにあてている。また新しい工夫をもつて重要な経済史に関するテキストの選択をなしているが、その中十七まで中世史のものである。フランスに於てはいまの所まだ中世経済史だけの一般書はあらわされていない。たゞベルギーのドエアエール (R, Doehaerd) 女史による「中世ベルギー人の経済的発展」(L'éxpansion économique belge au moyen âge, Bruxelles, 1946) は簡単ではあるが、なかなかよい本といえよう。中世の初期について即ちメロバンジャン時代については Salin, E. La civilisation mérovingienne d'après les sepultures, les textes, et le laboratoire, Vol. 1 Les idées et les faits (Paris, Picard, 1950) がある。ピレンヌの有名な Mahomet et Charlemagne (Bruxeles 1937) がいまもなお支配していて、その論議にあけくれしているといつても過言ではない。最初のものはロプェ (R. S. Lopez) の (Mahommed and Charlemagne revision 1943) によるが、以来いく人かの人々がこの問題にとりくんだ。そしてピレンヌを批別し、それを修正した。貨幣の問題、とくにヨーロッパの金の消散の問題、そして新しい経済環境の確立については、ロンバール (Lombard) の一連の研究が光つている。

Les bases monétaires d'une suprématie économique. L'or musulman du VII ème au XI ème siècle, dans Annales (1947)

Mahomet et Charlemagne, Le problème économique dans Annales (1948) ピレンヌに対する批判的研究である。

La route de la Meuse et les relations lointaines du pays mosan entre le VIII ème et le XI ème siècle, dans L art mosan, Journée, d'études, Paris 1952.

それらはいずれもよく調査され、工夫されてはいるが、又ある意味では仮定的であるといえる。またチイポロ（C. M. Cipollo）が次の如きものを書いている。

Encore Mahomet et Charlemagne, L'économie politique au secours de l'histoire dans Annales 1949

かつてアメリカの学者レウス（A. R. Lewis）は Naval power and trade in the Mediterranen 500—1100 (Princeton, 1951) に於て地中海に於ける経済的統一を破つたのはアラブであるよりも寧ろビザンチンであるとの新説を出している。それはある程度ピレンヌ説を動揺せしめるに足るものといえよう。彼は五世紀ないし八世紀に於けるゴールの大西洋岸に於ける商業航海の重要性を指摘しているのである。(Le commerce et la navigation sur les côtes atlantique de la gaule du V ème au VIII ème siècle (Le moyen âge 1952) 更に Encore Mahomet et Charlemagne, Revue historique 1954 に於てペロア（E. Perroy）はこの問題について最近の若干の問題をとりあげ、貴重なる考慮を払つている。またイムリー（Fr. J. Himly）の貴重なる論文は前記のロンバールの一連の研究にいたい批判をあたえている。イムリーの論文は "Y-a-t-il emprise musulmane sur l'économie des états européens du VIII ème au V ème siècle, Revue swisse d'Histoire V. 1955 である。

この様にいつまでもピレンヌをめぐつて論争や批判がつづけられているということはつまりピレンヌのイデーの豊富さ

にもとずくものである。中世初期の問題はいまもなおピレンヌをめぐつているといつても過言ではない。

四

社会と社会階級については論文のあらわれたものが数多い。まずなによりもマルク・ブロックによつておこされペラン(Ch. Ed, Perrin)の指導下になされた二つの論文をとりあげねばなるまい。一つはドウリンゲルのもの、他はデュビーのものである。

Ph. Dollinger "L'évolution des classes rurales en Bavière depuis la fin de l'époque carolingienne jusqu'au miliu du XIII ème siècle ,1949. G. Duby "La société aux XI ème et XII ème siècles dans la région mâconnaise" 1952

ちなみに Ch. Edmond Perrin は学士院会員 Membre de l'Institut であり Professeur d' histoire de moyen âge à la Sorbonne であるが、その La seigneurie rurale en France et en Allemagne du début de IX à la fin du XII e siècle は講義案として秀れたものである。

ドウリンゲルはドイツの農村階級の状態が、カロロ時代にはあまり他と変らなかつたのに、次第にその固有の生活をいかにして変える様になつたか、そしてフランスとドイツとがいかにして違つたものになつて来たかを示している。デュビーは亦地方的なモノグラフィーをなしとげたのである。俗人の社会を描いて鋭く、その環境を離れさせないで、家族や財

産の歴史をたずねながら結びあわすつらなりをもとめているのだ。経済・制度・社会・政治が調和的に彼のペンの下に結合されているといつてよいであろう。

農奴についてはその一般性に関するものが多い。デュビーやドウリンゲルのものもあるし、又ブートルーシュ（R. Boutruche）のものも問題作であろう。Robert Boutruche, La crise d'une société seigneurie et paysans du Bordelais pendant la Guerre de Cent Ans, Strasbourg, Paris, 1947 は一九四四年六月十六日のレヂスタンスの名誉ある庭にて死んだソルボンヌの Marc Bloch の記念に捧げられている。これは Robert Boutruche, Une société provincial en lutte contre le régime féodale, (L'alleu en Bordelais et en Bretagne du XI e au XIII e siècle) 1917 につづくボルドー地方史研究であるともいえる。ボーザール（M. Boussard）はマルク・ブロックに従がつて Colliberti の状態を定義することに興味ある注意をひいた(M. Boussard, Serfs et Colliberti dans Bibliothèque de l'école des chartres, 1947—1948) 又ゼニーコー Genicot はとくに Namurois の枠の中で貴族の起源の問題をとりあつかつた。

Le Genicot, Sur les origines de la noblesse dans le Namurois dans Revue d'histoire du droit, XX, 1952

Do; Le destin d'une famille noble du Namurois, dans Annales de le Société Arch de Namur, 1953

Do; De la noblesse au lignage dans Revue belge de Philologie et d'Histoire, 1952

社会階級の中で、その特殊なる性格の故にとりわけ専門家の注意を惹起するのは奴隷であるが、これはフランス自体にはなく、ローマ時代・ガロ・ローマ時代の特別な存在であると意見の一致を見ている。しからばいかにしてこの奴隷がなく

なつたかは興味ある問題でなければなるまい。これに関して故マルク・ブロックの論文はその示唆によつて人々の胸をえぐるのである。(Comment et pourquoi finit l'ésclavage antique, Annales, 1947)

五

農業史の研究はその殆んどがいまもなおマルク・ブロックの「基本的性格」の業績に負うているといつてよかろう。ブロックの新版は一九五一年に出た。(Bloch M. Les caractères originaux de l'histoire rurale francaise, Paris 1951)

Marc Bloch の成果は一九四〇年代に続いて戦争にともなう障碍を排除しつつ続々と発表された。とりわけ A. Dété́ge, L. Génicot, R. Boutruche, L. Verrieit, Ph. Dollinger 等の農業社会の構造に関する一連のモノグラフィーは常々何等かの程度に於て Bloch の前掲書にふくまれている示唆から刺戟をうけているのである。Ch, E. Perrin の Recherches sur la seigneurie rurale en Lorraine, 1955 は地方的個別研究への途を開いたものであるが、以来十一世紀以降の農村社会の精密なる分析が行われるに至つた。

一九三一年頃からマルク・ブロックの死に至る期間の彼の労作、論文はまだ全部発表されていない。彼の晩年の思想をうかがうにたるこれらの論文の出現を待望するものである。なお G. Ligernard, Le régime rurale de l'ancienne France, 1942. は農業全体の概説として便利である。この点からいつて一層注目すべきことはいままで殆んど不可能の如

く思われていた中世ヨーロッパの農業全体に関する総括が出来たことであろう。これまで一国の国民的範囲に限り、それから出る勇気のなかつた学者をしてより広い範囲に研究を拡げさせたのである。即ちグランとデウラアトウーシュとの共著「中世の農業」がこれである。(R. Grand et R. Delatouche L'agriculture au moyen âge de la fin de l'Empire romain au XVI ème siècle, Paris, 1950) よく古文書を駆使して農業技術の変遷をあとずけているが、といつてもフランスに中心があり、補助的にイギリスを取扱つている程度であることは、この仕事の困難さを思わせるであろう。しかしながらマルク・ブロックによつて開かれた道を有効に進んでいるといえる。また、ブートルーシュ R. Boutruche の百年戦争時代のボルドー地方の研究は一つの道を開いたものといえる。耕地と森林の土地割合についても研究している。(R. Boutruche, Le crise d'une société 1947. A: Talamas, La société seigneuriale française, 1050—1270, Paris, 1951. 第一章に於て中世の政治民主的環境、第二章に於てフランス農村の形式をあつかつている。多くはブロックそれに継ぐ諸学者の業績を綜合したものである。なお中世史に関する示唆に富んだ一書としてここに Ch. Ed Perrin, Observations sur le marse dans la région parisienne au début du IXe siècle (A. 1945) をあげておこう。Jean Bodin 協会も亦この方面にあてられた書物をあらわしている。(Bruxelles, 1649)

中世の荘園に関してはいろいろのものがあるが、とりわけ農村構造の型に関するものが秀れていよう。Annales の各巻各号にはこれに関するものを数多く見出すであろう。その多くは農業問題として取扱つている如くであるが、地理学へ呼びかけて問題の解明を期しているものが多い。

Boussard, T; La seigneurie d' Bellême aux Xe et XI e siècles (mél, d' Halphen.)

Ourliae, P. L'hommage servile dans la région toulousaine (mél d' Halphen)

Héyounet, Ch; Observations sur la seigneurie rurale et l'habitat en Ronergue du IX e au XIV e siècle (ann midi 1950)

アリュの問題も重要である、R. Boutruche, Une société provinciale en lutte contre le régime féodal: L'âlleu en Bordelais et en Bazadais du XI ème au XVIII ème siècles, Rodg, 1947 を見よ。

土地問題については J. Balon, Les fondements du régime foncier au moyen âge, Publ, Anc. Pays et Ass. d'Etats, VII., Louvain, 1954. Y. Lebel, Hist, administrative économique et financière de l'abbaye de St. Denis dans la province de Sens, (1151～1346), Paris, 1935

また Y. Bézard, La vie rurale dans le Sud de la région parisienne de 1450 à 1560, Paris, 1929 は Saint-Germain des Près について研究せるものである。パリ地区の生産の発展と農業階級の発展について述べている。パリ地区はとりわけ都市市場と都市社会によつて演ぜられる役割の特殊的なる例である。パリのブルジョアと寺院の資本は百年戦争後の再建に役立つたのである。

なおベルギーの荘園制についてはガンスホーフの論文が立派な教示を与えてくれるのであろう。(Manorial Organization in the Law, Trans of the Royal Historical Society, 1949) フェルジナント・ロートの研究に続いて土地財産

の広さや価値についてのいろいろの形式の研究があらわれているが、就中ディディエのものが面白い。それは十世紀から十二世紀に至るグルノーブルの寺院の不動産に関するものである。

Notes sur la fortune immobilière de la cathédrale de Grenoble du X ème à la fin du XII ème siècle dans Annales de l'Université de Grenoble, 1946.

農業史部門に於て最も注意されたものはブドウ酒の栽培の歴史であろう。地理学者のディオン R. Dion がとりわけこの問題と取り組んで多くの論文を発表している。

R. Dion, Viticulture écclésiastique et viticulture primière en moyen âge, dans "Revue historique", Grands traits d'une géographie vincole de la France, la viticulture médiévale (publicat de la Soc. de Geogr, de Lille, 1948~1949)

又 Annales 誌上にもいろいろの論文を出している。

R. Dion; Origines du vignoble bourguignon (Annales, 1950)

R. Dion; Métropoles et vignobles en Gaule romaine, L'éxemple bourguignon, Annales, 1952.

なお地方経済史の白眉とてはアンジュ地方の生活を取扱つた次の論考をあげねばなるまい。

Boussard, T; La vie en Anjou aux XI e et XII e siècles (Le moyen âge 1950)

六

中世経済史の研究が農業方面にのみ限られるという風なことは、この国に於てはない。しかし農業史に比べて工業史の研究は盛んでないとは言えよう。たゞ繊維工業史の研究は比較的に盛んである。それは寧ろベルギーのフランドルの研究に見るべきものがある様に思われる。コルナエール（Emile Coornaert）はフランドル地方の工業史の専門家であるが、農村と都市の毛織物業の相互的な関係について見事な見解を発表している。（Revue belge de philologie et d'histoire, 28 (1900) ギー・デポエルク（guy Depoerck）の La technique et la terminologie de la draperie médiévale en Frandre et Artois もなかなか優秀なものである。コルポラションやギルドに関する研究はなにも放棄され、見すてられたわけではないが、かつて即ち一九四五年までほどには流行していない。ただ上記のコルナエール（Em. Coornaert）が中世のギルドの起源について新見解を発表したことは一顧の価値があろう。

E. Coornaert, Draperies rurales, draperies urbaines, L'évolution de l'industrie flammande au moyen âge et au XVI e siècle (Revue Belge Philologie et d'Histoire, 1950)

エミール・コルナエールはピレンヌの衣鉢をつぐものである。教授はホントスホーテやベルグ地域の農村毛織物工業を詳細に分析して、ピレンヌの研究をいつそう深め内容豊かなものにしている。Emile Coornaert, un centre industriel d'autrefois. La draperie-sayetterie d'Hondschoote, 1930, Do, une industrie urbaine du XIV siècle. L'industrie

de la laine à Bergues, Saint-Wince 1930. 彼は宗教的起源を重んじ、ギルドに社会的経済的な要素が出てくるのは十三世紀であると考えている。

Em. Coornaert; Les ghildes médievales, V ème XIV ème siècles dans Revue historique 199 (1948)

これはその定義と発展を取扱へるものである。E. Coornaert はかねてギルドについて立派な研究をなしていた。Les corporations en France avant. 1789 (1941) は文献と方法についての示唆的な概観をもつているものだし、Annales に出た Des confréries carolingiennes aux ghildes marchandes (1942) はすぐれたものであつた。

なお G. Le Bras, Les confréries chrétiennes (Revue historiques de droit français et étranger, 1940~1941) もよい。フランドルの毛織物業についてはかねて、G. Espinas や H Pirenne がよい研究をしていたが、最近では G. Espinas が次のものを発表している。

G. Espinas, Les origines du droit d'association dans les villes de l'artois et de la Flandre francaise jusqû au début du XVI e siècle (2, vol 1942) Métiers, associations et confréries du métiers: l'exemple des Naypiers de Toulouse. (A. 1945)

その他工業史については次の如きがある。

Scheneder, T; Note sur l'organisation des métiers à Toul, au moyen âge (mél, H. Halphan)

Zeller, G; L'industrie en France avant Colbert (Rev. d'hist, écon, et sociale, 1950)

Labal, P; Notes sur les campagnes migrateurs et les sociétés de campagnes à Dijon à la fin du XV e et au début du XVI e siècle (Ann Bourgogne, 1950)

七

商業史については如何。

中世の商業については、まず第一に挙ぐべきは「商業史」五冊本の出版であろう。これは J. Lacour-Gayet の指導下に出たものだ (Histoire du commerce, 1950) その中の二巻は大部分 Mme Boüet の執筆にかかるもので、中世にあてられているのである。それは常に絶対的に完全でないにしても、明快で便利なものである。ロプェ (R. S. Lopey) のものは短かいが、中世の商業史についてはとりわけ立派である。(Du marché temporaire à la colonie permanante. L'évolution de la politique commerciale au moyen âge dans Annales IV, 1949)

中世前期については細かいいろいろの研究が出た。今日ではもう人々はカロランジャン時代の国家がまったく商業活動を無視したとは考えない様になってしまっている。これに関する論文は多く Annales 誌上に出ているのである。

R. Doehaerd, Au temps de Charlemagne et des Normands, Ce qu' on vendait et comment on le vendait dans le Bassin Parisien (A. 1947)

地中海の商業についてはランベール (G. Rambert) がその協力者と共に「マルセイユの商業史」(Histoire du

Commerce de Marseille, 1949—1951 5 vol)の大著をものにしている（既刊三冊、一五九九年までの叙述）Histoire du commerce de Marseille-vol 1 L'antiquité par R. Bueque; le moyen âge jusqu' en 1291. Par Régime Pernoud vol II. De 1291 à 1423 par E. Baratier: de 1423 à 1450 par F. Reynard, vol III, De 1480 à 1515, par R. Callier; de 1515 à 1599 par J. Billioud (3 vol, Paris, Plou, 1956～1) Histoire du commerce de Marseille (IV) De 1599 à 1660

ウォルフ Ph. Wolff のものを初め、いろいろ中世の末期に関する研究が出ている。ウォルフのものは「トールーズの商業と商人」(Commerce et marchand de Toulouse 1954) である。これは豊富なる資料をもつて永らく無視されて来た一つの地方の商業に関する経路を丹念に調査したものである。又モオラア (Mollat) は中世末期のノルマンの海上商業を取扱つている。(M. Mollat, Quelques aspects du commerce maritime breton à la fin du moyen âge (mémoires de la société à l'histoire et d'archéalogie de Bretagne, 1948). (Le commerce maritime normand à la fin du moyen âge 1952) 古文書をあさり、海上商業は百年戦争の危機ののちに起つたことを明らかにせるものである。

中世の商業を考える場合、ジャク・クールの活躍は目ざましい。モオラアはその協力者と共にこれに関する優秀なる業績を発表している。(Michel Mollat et collaborateurs, Les affaires de Jacques Coeur. Journal du procureur Dauvret, Paris, 1952—1957. 2 vol. 又マリネスコ (Marinesco) のジャク・クールの研究も有名である。(Marinesco,

Jacques Coeur et ses affaires aragonaises, catalones et napolitaines dans Revue hist, 205, 1951. Du nouveau sur Jacques Coeur, (mél L. Halphen)

商業史の中ではブドウ酒の取引をあつかつたものが目立つている。中世に於けるブドウ酒の商業は非常に重要であつた。就中それに関するルノアール（Yves Renouard）の研究が進んでいる。

Renouard, Le grand commerce du vin au moyen âge. Revue historique de Bordeaux, 1952

Renouard, Le consomation des grands vins de Bourgogne et du Bourbonnais à la coeur pontificale d'Avignons. dans Annales de Bourgogne, 1952

その他でもブドウ酒の商業取引に関する歴史的研究が多く出ている。（E. Vaillé, Histoire générale des portes françaises, Des origines à la fin du moyen âge, 1947）

交通史に関してはトウルーズ、ボルドー地方に関する論文が多い。例えば Godard, T. & Wolff. PH. Un courant commercial à travers la France au début du XI e siècle, de Toulouse aux Pays Bas (Rev. du Nord, 1950). Higonnet Ch; Un mémoire sur les péages de la Garonne au début du XIV e siècle (Ann. Midi 1947). Lestscqusy, Comment on voyageait au moyen âge (monde français, 1950).

Renouard, Y. Les voies de communication entre pays de la Méditéranée et pays de l'Atlantique au moyen âge, problème et hypothèses, (mel, L. Halphen).

簿記や商業技術に関する研究も盛んであつて、多くの人々が各地の記帳によつて商業活動を個別的に研究している。こうした地道な研究がもつと我が国にも起つてよさそうに思う。

貨幣史についてはラフォーリー（Lafaurie）の著書、Les monnaies des rois de France de Hugues Capet à Louis XII.（Vol 1 Paris, Bourcey, 1951）を初め、多くの論文を見い出すであろう。Boutier, P. H. L'or et l'argent en Occident de la fin du XIII e au début du XIV e siècle（C. R. Acad, Inscript et Belles-Lettres, 1951). Boyer, G. Un texte inédit du XII e siècle sur l'atelier monétaire de Toulouse（ann Fac. Droit Aix 1950). Rey. M. Les émissions d'écus à la couronne à l' hôtel du monnaies de Paris vers la fin du XIV e siècle et dans les premières années du XV e 1385—1413（mél L. Halphen）などがその代表的なものである。

八

中世の後期に於ける経済的変遷については、Halperin, J. Les transformations aux XII e et XIII e siècles（Rev. d'hist éco et sociale, 1900. No. 1. et 11.）が興味がある。

十四世紀の中葉から西ヨーロッパは一連の危機を経過する。それは百年戦争によつて深化されたものである。それは社会経済史上非常に重要性をもつている。ブートルーシュ（Robert Boutruche）の「百年戦争中の領主社会の危機とボルドー地方の農民」（La crise d'une société seigneurs et paysans du Bordelais pendant la Guerre Cent Ans,

Paris. 1947) は最も注目すべきものだと思う。また R. Boutrouche, La décastation des campagnes pendant la guerre de Cent Ans et la reconstruction agricole de le France (mélange, 1945, III. Etudes historiques. pp. le Faculté des Lettres de Strasbourg 1947)

百年戦争の危機がボルドー地方の農民に及ぼせる影響について考察せるもので、領主と農民の関係の中に農業の機能をとき、ボルドー市の商業、ブドウ酒の輸出、戦争による破壊、その結果としての不安定を詳しく論じている。一九四九年のアナルに出たペロア (Perroy) の簡単なる論文もまた重要といえよう。(La crise du XIV e siècle) à l'origine d'une économie contractée (A. 1949) この時代の矛盾をいかにとくべきか。ペロアはこの時代の矛盾をもとめる。ペロアは主たる原因の税制にもとめている。彼は十五世紀の中葉から十六世紀の中葉にかけて社会は停滞し、平凡なものになつたと結論している。この結論はフランスだけのものか又、ヨーロッパ全体のものか。これについて、ヒルトンがアナルに発表した論文は示唆に富んでいる。R. H. Hilton, Y-eut-il une crise générale de la féodalité ? dans "Annales" 1951, 彼は十四世紀から既に封建経済の不能があつた、そして生産力の傾斜があつたと説く。

経済史の社会史的考察をなす場合、重要なるポイントに人口増加と荒地開墾の問題がある。アナルの各巻はこの問題を大きく取扱つている。かつてマルク・ブロックはつとにアナル誌上に Les Invasions: occupation du sol et peuple ment, Annales, XVII. 1945) を発表した。ロブラン (M. Roblin) は非常に狭い範囲であるパリの郷土について地名学に基礎をおく人口の研究をなしている。祭祀についても考察している。(M. Roblin, Le terroir de Paris aux

époques gallo-romaine en franque. Peuplement et défrichement dans la civitas des Parisii, Paris, 1951.)

開墾を取扱つたものとしてはルトーシュ（R. Letouche）がメーン地方に関して秀れた研究を発表している。（R. Letouche, Defrichement et peuplement rurale dans le maine du IX e au XIII e siècle, dans le moyen âge 1948.）人口増加については Flandre や Auvergne, や Périgord のものを取扱つた研究が多い。モラーの研究は秀れたものだ。M. Mollat, Les hôtes de l'abbaye de Bonbourg dans Mélange L'Halphen 1951.）その他に次の如きがある。

G. Fournier, La création de la grange de Gergovie par les Prémontrées de S. André dans le moyen age, 1950

P. Angué, Le conquête du sol en Périgord méridional dans Mélanges, Faucher, 1949.

史的人口学（La démographie historique）は中世史家によつてここ十年来非常に活潑に取扱われている。とりわけ R. Reinhard, Histoire et démographie, Rev. historique. 203 (1950) はよいものである。また次のものも挙げるべきであろう。

L. Genicot. Sur Ies témoignages d'accroissement de la population en Occident du XIème au XIIIème siècle dans cahiers d'histoire mondiale, 1952.

フランスの一部の都市人口の発展は詳細に F. Lot によつて研究された。Recherches sur la population et la

superficie des cités remontant à la période gallo romaine (1945—1952, 3, volumes., Paris) 殆んどすべての都市の歴史的モノグラヒーは現在人口学的問題に地位をおいているといつてもよかろう。専門家の間ではいま人口増加がどこでとまつているかを知ることに問題が一致しているといつてもよかろう。十四世紀の中葉にありとするものは一三四九年と一三五一年の間にヨーロッパの一部を荒したペストに関連せしめている。黒死病とその結果については多くのモノグラヒーの対象となつているといえる。フランスでは Yves Renouard, Conséquences et intérêt démographique de la Peste Noire de 1348 dans Population, 1948 が見立つている。

九

都市の歴史 Histoire urbaine は矢張もつとも社会史的に旺盛なる研究分野といつてよかろう。最近の都市研究の動向としては中小の聚落 (agglomération) に注意が向けられているということであろう。又都市形成以前 (préurbaine) の九—一一世紀の頃に関心が向つているといえよう。

更に又国民的な枠の範囲の中で綜合(サンテーズ)を試みようとしていることである。そしてアクセントは制度史的な側面よりも経済社会 (économie sociale) の要素の重視に向つているということである。また考古学との協力によつて都市の地形学的研究 (topographique) がはやつて来たことである。最も注目すべき労作はプチー・デュティリス (Petit-Dutaillis) の書物 Les communes françaises, caractère et évolution des origines au XVIII e siècle, Paris, 1947) であろ

う。彼は社会的な実在としての都市（la ville）を研究対象とせず、法制的な実在たるコミューン（la commune）を対象としている。彼の研究は十二世紀にはじまり、コミューンヌの説明的な学説を見い出そうと努めている。彼はそこに宣誓された協会 association juré を見出し、一つの方程式を考えている。即ち Commune＝serment commun で、コミューンヌ即ち共同の宣誓なのである。リヨンはゴール・ローマの一つのメトロポール（métropole）であつた。そこで St. Laurent の教会や地下墓所が発掘された。それは七世紀又は六世紀に遡るものである。これについては Wuilleumier, Audin et Leroi-Gousham の秀れた研究がある。（L'église et la nécropole, S. Laurent dans le quartier lyonnais de Choulans, Lyon, 1949）又 Lombard, M. L'evolution urbaine pendant le moyen âge, Bull. Soc Marc Bloch de Toulouse, No. 2 1950—1）も立派なものだ。

比較史的問題を追求しつつ Société Jean Bodin は次の書物を出版している。La ville, linstitutions admimistrations et judiciaires, Bruxelles, 1956. ローワル河とジロンド河の間の都市の地形学的研究はクローゼ（R. Crozet）によつてなされた。（Paris, 1949）その他 Mulhouse, d'Aire, de Langres, Montreuil sur Mer, Marmende についての研究がなされている。

Moeder, Les institutions de Mulhouse au moyen âge, 1551.

Bertin, Une commerce flammende-artésienne, Aire sur la Lys des origines au XV ème siècle, Arras, 1947.

F. Claudon, Une ville sur temps de l'émancipation communale, Langres du XII e au XIV e siècle dans. Annales de Bourgogne, 21 (1949).

J. Lestocquoy, Les origines de Montreuil sur Mer dans. "Revue du Nord" 1948.

Ch. Higonnet, Le développement urbaine et le rôle de Marmande au Moyen Age, Agon, 1952.

故人となつたエピナス（G. Espinas）はまことに都市研究の専門家であつたが、彼の最後の二書はとくに St.-Oemer, Lannoy du Nord et de Geimes にあたえられている。Deux fondations de villes; Saint-Oemer et Lannoy du Nord, Paris, 1946. Le droit économique et sociale d'une petite ville artésienne à la fin du moyen âge; Guines, Paris, 1949.

レサージュ（G. Lesage）は一二六四年から一三四八年に至るマルセイユを描き、港湾の経済的発展に及ぼせる政治の影響について論じている（一九五〇年）

デイエプ港、十五世紀の簿記はモラー（Mollat）をして新しい研究を行わしめる機会を与えている。（Paris, 1951）ルウー女史（Mlle Lehoux）は St.-Germain des Paris の町について大著をもたらした。この著物で彼女は僧院が都市の萠芽をなすと説いてピレンス的見解に反駁している。（Paris, 1951）最も主要なる都市のモノグラフィーはシュナイダー（F. Schnaider）が十八・十九世紀のメッツ（Metz）の都市に対してなせるものであろう。（Nancy, 1950）ローマ起源の司教都市メッツはその繁栄の基礎を両替屋や金貸しにおいていた。都市の政府はギルドに何の役目をもたない都市貴

族 patriciat によつて支配されていたと述べている。彼等は土地所有や農業企業にその財産を投下することによつて当時としてはイタリヤ以外ではあまり見られなかつた様な広い都市の状態をつくり出したと説いている。またガンスホープはフランドル伯によつて与えられた都市解放について研究している。(一一二九年頃について)(Ganshof, Le droit urbain en Flandre au début de la première phase de son histoire dans Revue d'histoire du droit, 19 (1951) なおガンスホープの著作の外に F. Vercauteren, Etudes sur les civitates de la Belgique seconde, Bruxelles, 1943. J. Lestocquoy, Les Villes de Flandre et à'Italie sous le gouvernement des patricien (X e-XVe siècle) Paris, 1952. H. Werveke, Gand, Esquisse d'histoire sociale, Bruxles, 1946. フランドル地方については特に商工業及び都市についてのすぐれた研究が多い。それはこの地方がアルプス以北での先進地区であり、羊毛の特殊生産地帯であるということと、エピナスやピレンヌ以来の学問的伝統のしからしめる所であろう。史料としてはピレンヌの前著につぐ H. Z. de Sagher 編纂の Recueil de documents relatifs à l'histoire de l'industrie drapière en Flandre, Vol 2, Bruxelles, 1951 が出ている。毛織物業については刮目すべきものに G. de Pcerck; La draperie médievale en France en Artois, 3 vols, Bruges 1951 がある。

その他都市の研究には次の如きものがよい。

Chaume, M. Les origines de Dijon (ann. Bourgogne, 1948)

Combes. J, Le port de Sérignan (ann. Midi, 1950)

Combes. J. Les donations à le réparation du port d'Aignes-Mortes (mél L. Halphen)

Musset. L. Les villes épiscopales et la rennaissance des églises suburbaines en Normandie (Rev. d'hist de l'église de France, 1948.)

Tournier, Cl. La vie à Dijon de1420 à 1560 ravitaillement et commerce (ann Bourgogne, 1950)

中世都市の研究に関し、そのブルジョアの成長・活躍・影響に卓越せる研究を見い出すであろう。この点に関してはストラスブルグや上ラインの都市研究がよいと思う。Ph. Dollinger, Patriciat noble et patricat bourgeois à Strasbourg au XIV e siècle dans Revue d'Alsace, 99, (1950—1951) ドリンゲルの研究はその代表作である。次の論文も注目すべきものだ。J. Lestocquoy, Patriciens du moyen âge. Les dynasties bourgeoises d'Arras du XI ème au XV ème siècle, Arras, 1945. Feuchère, Dr. La bourgeoisie lilloise au moyen âge (Annales, 1949). Geofferoy, P. Recherche sur la fortune des bourgeois dijonnais au XV e siècle (ann Bourgogne 1948).

一〇

法制史が経済史と深い表裏の関係にあることはいうまでもない。とりわけ中世史の研究には早くから手をつけているだけ、法制史の方が一日の長があることはいなめない。まず一般的概説書として中世をも大きく取扱っているものを二、三挙げておこう。

Olivier Martin, Historie du droit française des origines à la Révolution, Paris, 1948.

Aug Dumas, Manuel d' histoire du droit français, Aix, 1948.

Tissert et Ourliac, Manuel d'histoire du droit français, Paris, 1947.

封建制度に関してはいまもなおマルク・ブロックの劃期的労作が高い価値をもちつづけているが、これは寧ろ社会経済史に重点がある様である。それに対しベルギーのガンスホーフの名著はいまでは一番大きくクローズ・アップされているといえる。彼の有名なる『封建性とは何ぞ』(Qu'est-ce que la féodalité ?) は一九四四年に出、第二版は一九四七年に出た。その英訳は一九五二年に出版された。この書物はいまではもう封建制に関する古典にさえなつている。しかし乍らこの書物の封建性に関する概念は限定されている。即ち人間関係を支配する利権の制度の一体と見ているのである。そしてそれは一定の奉仕を負わす采地 tenures foncières の委譲に関するものであると見ている。この書物に於てガンスホーフはかつて一九三九年マルク・ブロックが la société féodale にていつた様なことをいわない。ガンスホーフによれば封建性はきわめて狭く、技術的法律的な言葉である。その地域についていうと彼は検討の場をかつてカロランジャン王国のあつた範囲と英国とに限つている。ガンスホーフは九世紀から十七世紀にまで拡がる歴史時代をすべて封建時代と呼ぶ様な見解をとらない。それはその基底において社会経済史的な見解をとつている人々の見方であり、ガンスホーフは寧ろ封建制を純粋に法律的・制度的なものと見ている。

なお封建制度の研究に於て貢献をなしている人々は次の如くである。例えば、ルマアリニィエ (Lemarignier) はオー

マージュ（従臣となる誓をなす礼）（hommage）について研究し、国境に用意された封地について検討している。（Recherches sur l'hommage en Marche, et les frontières féodales, Lille, 1945）又、ディディエ（N.Didier）は封地に関する権利について卓越せる研究を行つている。（Le droit de fiefs dans la Coutume de Hainaut au moyen âge, Paris,（1949）ナヴェル（H. Navelle）はノルマンディの封建制度をカエン（Caen）地方について研究している。（Dans "Bulletin de la Société des antiquaires de Normandie" 51（1951）

金銭による給地恩地については（Money fief）イギリスについて書かれているが、M. Sezaniecki はフランスについても研究を発表した。（Essai sur les fiefs rentes, Paris, 1945）又、リシャルドウ（H. Richardot）はフラン・フィエフ（franc-fiefs）について研究を遂げている。（Franc-fief, Essai sur l'exemption totale ou partielle des services de fiefs dans revue historique de droit français et étranger, 1948）

又ガンスホーフは騎士の起源について深く考究する所があつたが、これは卓見という外はない。（Qu'est-ce que la chevalerie ? dans Revue général belge, 1947）

ドーハンも亦同様な著作をものにしている。（G. Dohent, Histoire de la chevalerie en France au moyen âge, Paris, 1949.）

しかしながら封建制度の概念は日本の場合と相当へだたりがある様に思われる。ブートリューシュにしてもガンスホーフにしてもそうだ。封建制度という概念を狭く、法制史的に理解し、封建領主間の君主と家臣の支配の法律関係と理解し

ている。そして領主と農民との土地を媒介とする関係は領地制度 régime seigneurial, seigneurie とよんで、封建制度と区別している。(Boutruche, Histoire des institutions, moyen âge, Rapports de IXe congrès international des sciences historiques, pp. 47—471) 日本の様に封建制度を即農奴制度と考えたりはしない。それから切りはなして法制史的制度史的又は社会学的な見地からのみ考えている。日本の様に生産様式としての封建的土地所有を基礎とする歴史的な社会構成として理解している所は見あたらない。日本の歴史学界が西欧の自由主義国のそれから隔離し、孤立しているといえる。

又封建制度を論ずる場合常に場合、地域のことを考えている。いつもヨーロッパ特に西ヨーロッパの場を考えて、そこに於ける具体的な封建制度を一応考えて、その上で概念を設定している。事実が先であつて、抽象的な概念はあとである。概念から出発してものを見るのではない。われわれはもつと西洋の封建制度がどういう学術的用語であるかをよくよく見定めてから立場をたてて云うべきだと思う。日本だけの学問の孤立的立場をもつて、無理に西洋の既定事実をひねつて理解することは正しい把握の仕方ではないと思う。それが日本の立つている特質なる立場だという風な弁解や立論の仕方は長い目から見て学問の進歩の上から損をすると思う。

一

西洋中世経済史について考えられる第一の特徴は、それがその関連部門をも含めて極めて広い範囲にわたつているといえる。多様性に富んでいるといえる。農業史の研究が盛んであることはもとより当然であるが、商業・交通史についてもたくましく追求されていることである。又各レジョン毎の地方経済史の盛んなことはもとよりフランスの伝統による特徴であるが、いまもなお丹念にそれがおこなわれている。それはなにも全体の一部を研究してもつて全体に貢献しようとするものではなく、単なる一部の地域の中にも全体を蔽う様な具体像があり、その特殊性の中にものの個性にひそむ実相をさぐろうとしているかの如くである。

第二の特徴は歴史的綜合である。フランスに於ける綜合の意味は特殊であるが、いまや単なる純粋の出来事の歴史又は歴史家の歴史は終つたかの観がある。少くともある特定のフランスの歴史家はこの種の歴史概念をすてさつてしまつたかの様に見うけられる。されば歴史家の歴史（l'histoire historiante）以外の歴史というのは一体どんなものか。これはかねてルシャン・フェーブルがとなえている歴史的綜合（la synthèse historique）で、アナルの各号はこれの実現に長い努力をかさねて来ているわけだ。

第三の特徴は方法や歴史技術の上に於て、単なる古文書以上に考古学や発掘や統計に援助をもとめて来たことである。そしてより具体的な現実に緊密に結びつき、現象をより明確にしていることである。

第四の特徴は史学に於ける経済的社会的方法の重視である。これは現在イタリヤやドイツの史学界が精神史に力をいれているのに比較して、フランスが社会経済史に力をいれていることである。しかしそれは何も唯物史観的な歴史学が支配的であるということにはならぬ。経済史学も亦矢張フランス伝統の歴史学の上に立つているといつてよい。従つて機械論的観念論や決定論的なものの考えはあまり歓迎されていない。人間や社会が常に念頭にあり、社会の発現の形式としての人間生活の種々相を浮彫にすることに念願がある如くである。そして経済史学の外にイデーの歴史（l'histoire d'idée）、思想の歴史が強く要望されて来ている。

第五の特徴は国民的枠が必らずしも守られていないことである。より広い範囲のいわば世界史的な考慮がはらわれていることであろう。中世や封建時代はいわば国家以前の時代であつて、国民的枠での処理は出来ない。都市と都市との関係や道路や海上航海は国民的な枠を越えて人々を結びつけ、商品を流し、交渉をひろげていく。しかも従来の様な各国民の並立（justaposition）ではなしに、そうしたものの真の綜合に於て理解しようとしているかの如くである。ルシヤン・フェーブルの指導する Cahier d'histoire mondiale は中世史の部面に対しても、こうした見解をひろげているといえる。

第六は統計的数量的方法である。最近の経済史学に於ける方向の一つに数量的統計的方法がある。しかしそれの適応は近代や現在についてはさしずめ可能であるが、中世や古代については統計資料は不足しており、数量的取扱いが困難であることが多い。ギルドの構成員と村落・都市の大いさ、各時代の賃銀所得者と非所得者との割合という風な簡単なことでも屢々正確なる解答を得ることがむづかしいのである。しかしそれでもそういう人々によつて数量的図式的取扱いがここ

ろみられているのである。のみならず単に資本主義社会の中でものをいう場合は可能であるが、例えば封建制から資本制への移行という風な構造変動をあつかう場合、数量的な取扱いはますます困難となる。われわれは経済史学がやはりすぐれて人間の歴史なること（l'histoire de l'homme）を思うべきである。マルク・ブロックがいうが如き全体史（l'histoire totale）に於けるヒューマニスト的概念が常に重要だと思う。数量的方法の可能と限界は特に中世史の場合考えねばならぬことになろう。

第七の特徴は段階説・典型説の全くの放棄ということである。典型をもとめたのはドイツ歴史学派の功績であるが、そしてその影響の下になつたフランス経済史学であるが、長い道程の上でその脱却に成功したといえる。典型はつまり歴史の多様性を見失わしめるものであり、論理的なものを一時的なものとを混同することになる。歴史は論理ではない。段階的な考え方はいまでは揚棄されたといえよう。試みに現在のフランスの経済史書を開いて見るがよい。段階的な適用をしているものは殆んどないのである。かつて段階説が経済現象の分類に便利な範疇を与えたことは事実であろう。マックス・ウェバーの理想型は学者をして種々なる史実を対照することを可能ならしめた。しかしいまではこうしたものは経済史研究にとつて有害無益であると考えられている。特にこれによつて学生が歴史の要約と思いこむならばもつとも有害だといつてよい。

時代区分についても同じことがいえる。一般史の時代区分をそのまゝ経済史に適用する場合屢々不幸なる誤解をまねくのである。純粋に経済的な時代区分というようなものはない。かくて時代区分も亦仮定的なものと考えている。いまでは寧ろ第何世紀という風な観点から事実の世界を扱つているものが多い。